フォルケフィエンデについての断章

鳥越俊太郎

これは何もお芝居の中の話ではない。日本でも世界中でもあちこちに散見される民主主義のパラドックスという皮肉な話なのである。

例えばこの話はどうだろう？

沖縄の翁長知事は言う。

「沖縄はこれまで一変たりとも米軍基地を自ら差し出した事はない。それなのに今度は辺野古を新しい基地のために差し出せという。そんな不合理、不正義はない」

これに対し日本政府の安倍晋三総理は言う。

「普天間基地の辺野古移設はアメリカと合意した唯一の解決策である」

日本国の総意だから沖縄は認めろ！ということである。さすがにまだ

「翁長知事は日本人民の敵だ」

というところまでは来ていない。来ていないが、今後の展開はそうなっていくように思える。

この芝居のテーマはズバリ、民主主義の原理＝多数決の原理はいつ、いかなりときも正しいのかという疑問をなげかけるものだ。

町に湧出した温泉は町民にとってこの上ない朗報である。町を豊かにし、繁栄させてくれるだろう。

それなのに、町長の弟、ストックマン博士だけが、「温泉水は汚染されている」と主張する。これに対し温泉計画を主導する兄の町長は反論、あげくの果てに

「温泉専属医は免職だ。温泉に関する全ての問題から遠ざける為に解雇通知をすぐに出すよう手配する」

かくして兄と弟　町長と医者は対立する。町長はこうも言う。

「生まれ故郷にそんな非難を浴びせるものは人民の敵だといわなければならない」

このあたりから町の空気は変わっていく。

博士の味方だったはずの新聞も

「新聞編集者の第一の義務は何でしょうか。諸君？　読者の意向にそった紙面づくりではないでしょうか？」

読者の意向＝多数派に与することで博士を裏切る。町民は町長の側に立つ。孤立する博士が叫ぶ。

「多数が正しいなんて事は決してない。それはこの世にはびこっている偏見の一つだ。自由で判断力のある人間なら　そんな事は信じないだろう。国民の大多数はどういう人間だ？　賢い人間か愚かな人間か？　世界中どこでだって、恐ろしいほどの圧倒的多数を占めているのは愚かな人間だ、それは誰も否定出来ないだろう。」

太平洋戦争と気の日本国民を考えれば誰でもわかるはずだ。

そう！　誰にも否定できない。

「人民の敵」というレッテル貼りほど怖いものはないのである。